

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷二十三第

行發日一月一年六和昭

## 第十九回國際統計協會會議 記念特輯號

國際勞賃統計	フリードリヒ・ツアーン
統計學に於ける將來の領域	コラド・ヂニ
保護關稅の合理化	法學博士 神戶 正雄
南滿洲に於ける我租稅制度	經濟學博士 沙見 三郎
租稅滯納の統計的觀察	經濟學士 中川與之助
階級による差別出生率	文學博士 高田 保馬
農末に於ける農村人口及農村狀態に關する一推算	經濟學博士 本庄榮治郎
國勢調査に於ける年齢の誤謬	經濟學士 岡崎 文規
正米相場と期米相場との相關々係	經濟學士 谷口 吉彦
米穀の需要に就いて	經濟學士 八木芳之助
統計學の課題としての景氣變動の研究	經濟學士 蜷川 虎三
フランスに於ける景氣變動豫測論	經濟學士 松岡 孝兒
金融統計特に通貨統計に就いて	經濟學士 中谷 實
失業統計の方法について	經濟學士 益田 熊雄
保險と統計及統計學	經濟學博士 小島昌太郎
比較研究法と統計の比較	法學博士 財部 靜治

第十九回國際統計協會會議 記念講演會及統計圖書展覽會記事  
同統計圖書展覽會出品目錄

(禁轉載)

## 比較研究法と統計の比較

財 部 靜 治

## 一

西大路太子道とは、京都市に最近に乘入れつつ、今は昔の存在となりし新京阪鐵道株式會社の新線に接續せしめんとして、延長せられたる京都市營電氣軌道に於ける、一停留場の名稱なり。「牛に乗るへきは馬に乗り」(方丈記叙說中の一句)とせられし、福原遷都當時に比し、世事萬端の變急且大なりとすべきに拘はらず、此事あるを見誰か古雅幽邃の感を興さざらんや、又第二回國勢調査の結果として速報せらるる所によるに、人口十萬を超過せる市二八、別に尙同程度の人口を包容せる町も、少しは存すとせらる、(大阪朝日新聞第一七、六一五號社説參照) 全人口七千萬にも達せざるに拘はらず、人口地方分布の現勢上、是に似たる事實を示すもの、現世界の列國中何處にか存すべきとは、統計學に多少の理解ある者等しく訝るべき所なり。そは何れにしても、簡單に摘示せる右の二事實により、何を含意すとすべき、そは取りも直さず格物致知の目的上、或は古今を商較し、或は又東西に攷索する方法を探り、その真相に通達するの道あることなり。素より時

及處による比較研究の必要又有益なるは、輒近の社會諸學特に經濟學及社會學の研究上、普通に説かるる所なるを以て、今更かかる問題を掲ぐるは、聊か陳套に屬するの嫌ありと雖も、本邦に於ける右の二學研究の現況につきて察するに、かかる研究法適宜に採擇され得べしと想はるる諸題目に付、顧慮せらるること案外に尠く、之が應用に及ぶも必ずしも適正ならずと、思はるる節なきに非ず、而してそは方法に關する知識の消化、未だ順正ならざるに由來すとすべきものあり、今日方法そのものに關する研鑽を積むも、敢て遲しとせざるに似たり、蕪雜なる本編を顧みず、かかる研究の一端に資せんと欲する所以なり。

## 二

一學問に應用されたるものとしての用語「方法」を大觀すれば、之を二義に分ち得べし、即ち第一にその學問の諸眞理發見のため、踏み入るの要ある道を意味し、第二に他人をしてその眞理に通曉せしむるの道を意味せしめ得べし、甲は論理的方法又は研究法と呼ばれ得べく、乙は講説又は教授の方法と呼ばれ得べし、二者は決して無關係とすべきことなし、前者を取扱へる間に後者に必要なものを説く的機會あるべく、又「教めることにより學び」learning by teaching 否更に一步を進め「習ふことにより學ぶ」learning by doing は、特に統計學の研究上、進學の要諦とすべき所なり、以下吾人の主眼とする所、右の第一義又は狹嚴の意義によれる方法に存するや、謂

ふ迄もなしと雖も、第二義の方法を巧みに採入るるも、學問普及の目的上輕視すべからざるは注意すべく、こは特に社會諸學に關する米國近年の諸著書に就き、鮮明に窺ひ得べき所なるが如し、茲には單にその一例を示すの趣旨により、Whitbeckの「産業地理」序中の一節を、引くに止めんと欲す、即ち曰く「著者は徹頭徹尾教へ易き一書を著はさんとし、文は簡明に、内容は興味深からんことを期したり、本文諸節は故意に短くし、圖説、分布地圖その他圖解易知グラフィック、エーツの便法を洽なく挿み、殆んど各章末に要綱及課題を付せり、課題は本文中に取扱へる諸要點を復習又要約し、併せて又本文の所説に關係あるも、事實上その中に説かざる諸面につきての、思考を舞鼓するを目的とす」「諸例證は多くの根源、特に政府各省の出版物より拔萃す」と。<sup>\*</sup>

本邦古書中にも假令ば佐藤一齋の著「初學課業次第」(天保三、即西紀一八三三年著)の如き、學問小成のために素讀、講釋、會讀すべき書籍の順序を指示し、更に「儒業を以て教授せんとし人主の顧問にも備り、詞翰の道にも通せんとする人」のために、經、史、子、集の諸文献を列舉し、その間略説を挿めるあり、又本居宣長の著「宇比山踏」(寛政十、即西紀一七九八年著)の如き、學問は神道を主とすべきこと、國史を磨くべきこと、漢籍を交へ讀むべきこと、古歌をもよく學ぶべきことを骨子とし、初學者に脩學の方針を指示せるあり、學問の源流を獨り西洋並に洋學の渡來以後その流を汲める我邦の學風に、求むるの弊に陥り易き現時に處し、反省を促すの材料を授くる

\* Cf. Cossa, Guida allo studio dell' Economia Politica. 2. ed. 78, p. 40; Devas, Groundwork of Economics, 83. p. 20; Whitbeck, Industrial Geography. 24. p. 6,

こと多きも、今姑らく之を不問に付し、之を泰西につきて察するに、諸學の發達上その研究方法の一として、比較研究法樹立されたるは、近世に於ける智能的最大事功たり、比較解剖學は種々の種に於ける類似器官につき、その同異を觀察することにより、諸動物形態の交互關係及その進化に關する、最初の仄きを發見し、動物界に於ける自然法の常例的支配を、啓明するに資したり、一般に比較研究法のために從來暗黒及混亂の中に、隠されたる人智の全範疇に、光明と秩序とを齎したり、從來氣狂せの推測に、委ねられたる一範圍に於ても、之がために確實を期すべき議論の筋を生めり、嚴密に外見的客觀的なる立證を、大部分は施し兼ねべき諸事項につきても、比較研究を施すこととなりてより、嚴密に内面的なる一形式の立證を、挿み得べきこととなり、其の結果に就き割合に大なる確信を懷かしめ得べく、又誤謬に陥るゐるの弊尠なきを得るに至れり、こは英國の史家 Florence Freeman (本誌第十一卷五七五頁五八八頁參照) が、一八七三年の著書「比較政治學」Comparative Politics (P. 1) 中に説ける所なるが、氏は此主旨を承けつつ、先づ言語及神話の研究が、右比較研究法採用の結果、大發達を遂げたることを説き、此方面に於て言語學者、印度哲學者として有名なりし Max Müller (一八三二—一九〇〇年) 及牛津に於ける最初の人類學教授として、又原始文明に關する二大著により、知名なりし Edw. Burnett Tylor (一八三二—一九一七年) の功績、多大なるものあるを賞讃し、引續き説いて曰く、茲に比較政治學と題せるにつき、その政

治てふ語は、アリストートルがその大著の表題中に、含ましめたる意義と、同義に解せられんことを望む、而して比較政治學とは、政治的諸施設政府の諸形態に關する、比較研究を意味す、されば比較政治學てふ名稱下に、互に距たること最も遠き諸時代（古希臘史に造詣する所深かりし氏は、古希臘の國家と現代國家とを比較研究したり）及諸國の政治的諸施設間に窺はるる、幾多の類同アナロアスを指摘又集成せんと欲す、（政府の職分に關する明治以後の我邦學說史上、注目すべき一著書とすべき明治三年加藤弘之著「眞政大意」下の四枚に帝範の「民者國之先、國者君之本」とし、同書上の二〇枚うに仁徳天皇の詔に「天之立君本爲百姓、故君以百姓爲本」とせるを引き、是に關聯して論ぜる所と、軌近社會政策の精神との同異を想へ）此意味に於て予の問題とする所は、

Taylor が問題とせる所の一部分、詳言すれば諸風俗、諸儀式、諸信條等にして、諸國民及諸時代の政治的施設と關係あるを、一層詳細に取扱ふにあり」（前掲書一二頁）と、かくてその研究上「時として類似 likeness or resemblance は、一見して察知せらるるも、時としては表面に現はれず、その裏面に潜在することあらん、されど皮相的シユルパリアイシアルの不一致（Deutsches statistisches Zentralblatt 第十卷中、統計々數の「皮想的」變動及相違を取扱へる F. Zizek, „Scheinbare“ Veränderungen statistischer Zahlenergebnisse, u. „scheinbare“ Unterschiede zwischen solchen あるを併せて注意すべし）の内部に、屢々潜伏せる實際類似を、容易に看破するためには、同種の研究に於ける小練習の助けを借り、少しく思索を環らすのみにて足れり」（前掲書一三頁）と論じたり。比較研究法が史的研究法と共に、法律、經濟及社會の研究上行はるることとなりてより、如何にその進歩否革新を促すに貢献せるか、以下略説する所あるべきも、茲に尙淺薄

なる統計學者としても、心得おきて可なりと想はるる二點に就き言及せんと欲す、本邦古賢による言語の比較研究は、その一にして、文學の比較研究は、その二なり。

萬延元（一八六〇）年の序を付し、門人により公けにされし、平田篤胤（安永五―天保一四、即ち西紀一七六―一八四三年）著「俗神道大意」はその當時に於ける本邦神道實地研究の目的上、巧みに言語の比較研究を取入れたりとすべきものなるが、同書劈頭に說出せる一節は、是を割愛するに忍びず、以下その儘引用すべし、即ち曰く

凡て世の中の事にも物にも、名が違て同じ物があり、また名は同くて、事の違て居るがあり、其れをよくしらべ辨へぬと、大きに心得違ひが出来たり、また牽強附會と申て、微と此とは其筋の違て居ることをも、強に牽よせて、同じ物ぢやと附會さんとするやうな、誣説も出来る事ぢや、然れば物學ぶ人は、ここの譯をよく心得て居らぬと、折角學んだことどもが、諺にも勞して功なしと申す如く、むだ骨折と成てしまふことが多く有、熟々世間の學者を見るに、夫がけじからず多く、傍より見るに見かねるほど、扱々氣の毒なものぢや、夫はまづ物が同じくて名の違てをるものは、誰も能く言ふ、難波の葦は伊勢の濱荻、京の太夫は江戸のおいらん、俗家の妾は法師の大黒、これらはみな物が同くて、名の違て居るのぢや、又名は同くて、實事の違て居ることは、神道などがそれぢや、と申す故は、神道神道と一口にいへば云ものの、巨細に此を分て云へば、十二三にも分らうが、其内大きな相違の所を別ても、ざつと五つの差別が有ると、平田先生の右立言中に窺はるる比較研究の精神は、本邦度制の熱誠なる攷究にも及ばざり、即ちそは「此のほど源の弘賢ぬしの、狩谷望之が著はせる、本朝度攷と云ふ書を携へ來まして、此なむ如何と問るるに、此は前に己にも見せて、思ふ旨あらば聞かむと有ければ、我が意と

差へる節々を、何くれと書つけて贈り侍りしを、其後になほ潭く思へば、この望之が説はしも、玉梓の道かき亂る、忌じき非説にて侍りけり、と答ふるに驚かして、争で其由を書調てへ示せ給へと強らるるに、黙止あへず、此の事に筆とり初むる今日の日を、幾日と問へば、神無月の二十日餘り五日と云ふ日になも有りける、「人はよしからにつくとも我か杖は、やまと島根に立むとぞ思ふ」この前書を付せる上下二冊の大稿本「皇國度制考」(藏書は天保年中鍊胤の跋文を付する氣吹金塾藏版、本書につきては増訂圖書解題五二六頁、瀧本博士著典籍考二九三頁参照)なり、大和島根に立てむとするの杖は、人文科學に従遊する本邦人として、永く手に放つべからざる寶たり、若し夫れ度量衡の制度及實際問題は、經濟學及統計學上の根本問題なり、現今經濟學研究を主とする公私諸大學に於て、是を特別の一科目とすることなきの故を以て、輕視して可なりとすべきに非ず、吾人は他の機會に於て是を主題とし、論究する所ならんと欲す。

藏書枕草紙春曙抄初卷中に書入れし者あり、曰く「紀貫之古今序、源氏物語初卷、雅尙齊が詞、東坡が四時の序、淵明四時詩、皆四季の風景を筆にまかせて心をやり侍也」と、文學は元詞藻の無比絶倫を以て、その生命とすべきものたり、従ひて古今東西の作品につき、類同を究明せんとするが如き研究は、一見無用無益なるが如きも、右引用文はかかる研究も亦無意味ならざるを着想せしむ、果せる哉、「比較研究法が文學研究上、採用され得べき最も有用又有效なる方便の一た



るに、由來英文學の教育上應用せらるることなきを指摘し、「之が事由を適當の著書なきに歸し、その缺陷を補ふの趣旨により、A Book of Comparative Poetry, '08を著はせるWilliam Macphersonは、交聯の原則が何れの比較研究法應用にも伴ふべしとし、詩材の配合(假令は戰爭の詩、季節の詩等に就き)さてはその觀點、思想に於ける通用類同(齊一)及相違(不齊)を不さんとせり、惟ふに英文學以外に於ても、同種の主張は立てられつつあるを信ずと雖も、彼れ個人主義の一哲人 Nietzscheにより、數の子及「ざら」なる事物は、之を鬼及統計の手に引渡すと嘲けられし、その統計を學ぶ身としては、右の一事例を擧ぐるのみにて満足せん。

### 三

鰻魚即王莽所啗者、其殼曰石決明(詩本草中ノ一叙説)とせらるるは、英獨語にて海の耳 Seear Seohr とせらるる所なり、佛語により海の盡 beche-de-mer とせらるるは、虫に肖たる蛸ならで海鼠なり、同種動物に對し命名する所一ならざるも、以形似一名(松岡恕菴の語)の趣旨は、その何れにつきても窺はる、(Science arises from the discovery of Identity and Diversity とする Jevons の名句と、之を對照玩味すべし、拙著社會統計論綱二版四五及三二七頁參照)凡て各學問の端緒は、時及處の範疇内に於て、形、色、習性、狀態又は事情等の皮想的類同に關する皮想の觀察に外ならざる諸歸納に發せらる、假令ば古代に於て動物界を、禽獸蟲魚に分てるが如き之なり、現時にありては觀察は構造及機能の諸類

同に付遂げらる、是等凡ての最後として、一系列に於ける生起の類同及相違、並に大さの類同及相違に關する、系統的觀察は行はれ、因果關係の發見を促すに至る、五行の運行にて、水より火を、火より土を、土より金を、金より水を、水より木を生じ、又木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅つとする、相生、相尅の説は偽とすべきや真とすべきや、天地と時と人と「きひつかみ」の順を逐ひて、輪轉しつつ新聞を作るとすべきものなるや否や、自然科学者ならざれば之を判するに困しむと雖も、「磁石引針、琥珀拾芥」と先づその總論を書起し、「猫兒眼知時、有歌云、子午線、卯酉圓、寅申巳亥銀杏様、辰戌丑未側如錢」と坐右日觀さるべき此事にも及ぼし、「凡分身體衣服飲食器用藥品疾病文房菓子蔬菜花竹禽魚雜著十二門共四百四十八條皆療治及禁忌之事」(四庫全書總目提要子部四十參照)を説ける蘇軾の名著物類相感志(元蘇三即一六九〇年の和刻京東洞院通夷川上町林九兵衛版行あり)の如きは、實際的たらんとする經濟學者、社會學者として、深甚なる注意を拂ふべき一文献たるを信じて疑はず。

社會學の歴史は右所説の一例として完全なり、古代に於ける社會研究は、時による類似再集合、假令ば踊、出獵、軍事遠征、處による類似分配、假令ば獵區分配、集團せる個人の類似習慣及諸事情に關する、皮相の觀察に初まれり、社會の構造及機能に關する、一層注意深き觀察及分類は、プラトール及アリストートルにより遂げられたる、綿密の研究に大成されたり、次いで發生

\* Cf. Giddings, Inductive Sociology, p. 16. 以下の叙説も同著に頁ふ所多し。

を釋ね、諸原因を剔抉せんとするの試みは、長年月に亘りて行はれたり、Epicurus, Machiavelli, Bodin, Hooker, Althusius, Grotius, Hobbes, Spinoza, Pufendorf, Locke, Montesquieu, 及 Rousseau, のなせる所は然り、Comte は是等の研究全部を、該博に遂げんと企てたり、進化論の學問起りてより、その研究を一層精確に遂げんと勉むるに至り、構造機能に關する新研究は Spencer, Schäffle, De Greef, Combes de Lestrade, Gumpłowicz 及 Simmel により遂げられ、發生の諸新研究は、土俗學的著書の評論及羅列に、當るの方法をとり、Morgan, Maine, Bachofen, Lillienfeld, Mc Lenman, の如き諸土俗學者、並に Spencer, その他の學者により遂げられ、又原因の諸研究は Buckle, Marx, Spencer, Ward, Tarde, Durkheim, Fouillée 及 Le Bon 等により遂げられたり。

社會學的研究の二特殊方法たる、比較研究法及史的研究法は、歸納的なり、實際の研究にありては二者混用又交錯せらるることを以て、寧ろ普通なりとすべく、更に統計法に至りては、右二者に對し鼎立せるものとしても考へられ得べく、或は比較研究法の一種としても考へられ得べく、かくて又歴史に統計的研究を含み得べきが如く、統計に史的研究を伴ふべきことを認め得べし、(Giddings は「社會學原理」中、統計法を比較研究法の一種とせるも、「歸納社會學」にありては、之を史的及比較の二研究法の定量的形式としたり、社會統計論綱二版二二九頁參照)何れにしても普通に理解せらるるが如き史的及比較

は二研究法により、一定の事實が、定質上一定部類に屬するや否やを決し、類同あるや否やを究む、詳言すれば(1)時による生起の類同、(2)處による位置の類同、(3)形、色、習性、状態又の事情の類同、(4)交聯及交互繫續(構造及機能)の類同、(5)一系列に於ける生起(發生)の類同、(6)大さ(大量、數、歩合又は力)の類同に關して是を究む、換言すればミルが一致法と呼べる研究法を遂ぐ(Cf. Mill, Logic, Bk. III, Ch. VIII) 要するに前記二研究法の結果として、その定質的形式によれば右の六種類同中始の五種を授け、條件を歸結するの望を達せしむ。

社會的諸實在は之に間接觀察を施すことを、何等遮る所なしと雖も、理論を實驗又は試験(農事試験の如き)により驗めずには、比較的大困難あり、社會諸學は實驗の代りに、主として比較に依頼するの要あるも、之がためには長年月に亘りて知見を蒐め、又社會發展の幾多標本として千差萬別なるに、通曉するの要あり、就中その後者詳言すれば、對立すべき諸社會型間の比較は、社會の諸問題解決上、客觀性を期するための最良玉璫たり、頑迷 bigotry 及定道論 doctrinalism への最良解毒劑たり、社會諸學は社會諸學としては、主として比較研究法に依頼するの要あり。

比較言語學、比較宗教、比較法學、比較土俗學、家族及道德制度の比較研究は、諸社會的活動の諸形態中類似を宿すこと、そは又一發展を有すること、法則の常例的支配は社會的世界に及ぶことを示せり、比較研究法は生命ある者又は之に准すべきものの、諸學問上特色視すべき所なり。諸無機現象を研究する際、吾人は推測し得べきが如き道理により、究明せらるべき一現象を發現せしむべき諸條件を推測し、次いでその諸條件を與へ、かくてその現象現はるときは、その假

\* Cf. Hayes, Introduction to the Study of Sociology. p. 378.

說確かめらると考ふ、又吾人はその諸條件に變更を加へ、その結果としての現象につき、之に相應せる變化を發見す、されど社會諸學にありては究明せらるべき現象を、何處か之を發見し得べき所にて觀察し、その目前にて之を發現せしむべき諸條件を記録し、肝要條件たらず何時も現存すべからざるは、之を解釋中より省き、問題たる現象の種々事例間の相違と、その現象現出の條件となれる諸事態間の、相應相違とを觀察す、實驗科學と比較科學との對照たるべきは、後者に於て自然否一般に有りの儘が、諸事實を呈露する儘に、之を搜すに反し、前者にありては事實を作り出すにあり、解釋上肝要條件たらざるを省き、肝要條件視すべきものの一致を確かめ、原因的諸條件に於ける諸變化につれ、結果に於ける諸變化を交聯せしむるために、多くの事例を觀察するの要あることあるや前にも一言せる如し、かくて又是等多數事例を發見するため、多年多地方に亘りて之を搜すの要あり、特に異なる多くの同時社會として、諸條件の偏倚上出来る丈け廣き開きを伴へるものに就き、之を搜すの要あり\*。

各別にその特色だけを擧げて論じなば、史的研究法と比較研究法とは別物なり、されど比較研究法も一步を進めなば、自然又は有りの儘の「實驗室」にて、惹起さるる諸結果を窺ふべき、發生學的方法 (Genetic method) に展開することは、やがて生々之謂「易と宇宙を觀するの、寧ろ穩當なるを想はしむる所以たると共に、輒近社會諸學上特筆すべき一事功たり、こは科學上生命の各問題に就き、進化的發展的一背景を逆睹することを意味す、是等の問題に關する吾人の心理状態は、久しからざる以前迄は、カツフォルニア、印度人が、高キアメリカ杉 sequoias に就きて、懐け

\* Cf. Hayes, op. cit., pp. 449, 450. 以下の叙説も同書に負ふ所多し。

る所に似たるものありき、即ち是等印度人はその木を他の樹木と別扱ひとし、成長の賜なりと想はず、初より今の儘の姿を呈したりと考へたり、されど至大にして由來すること最も古き實在も新らしくして微小なるもの同様、因果態の常例的一連鎖により、無より發生し、成長したり、之がために現在を了解するの一端緒、否未來への一展望を遂ぐるの一端緒さへも授けらる。

特殊の各動物又は植物形態發展中、特殊の諸條件を伴ふべきも、有機的進化の普通法則、解釋の諸大原理は、諸植物及動物、哺乳動物及軟體動物、顯花植物及隱花植物につき齊一なり、同様に各社會的活動は、特殊の諸條件を伴ふべきも、社會發展の普通原理は、言語、宗教、政治及法律、藝術、劇、及儀式、科學及哲學、經濟策及道德律につき齊一なるもの夥し。

發生學的研究は生物學にても、社會學にても之を下級形態に施す際に效果多し、人體の解剖により、人の生命の性質それ自體に、最も輝ける光は放たれ得べきに非ざりき、寧ろ兎、ぶたねづみ、蠅、海膽、蚯蚓の如き動物の實驗によりて然り、そはその實驗法がかかる低廉材料により、應用され得べきが故に、然りと部分的には謂ひ得べきも、その外主たる理由としては、諸構造及諸過程が單純にして、會得せらるるに足るとすべきがため、又是等の單純なる諸階段は、最終結果につきての解釋を授くるも、こは其の結果それ自體の研究によりては、授くるの見込なき所なるがためなり、下級社會形態によりては、廣範圍の實驗は施し得ざらん、されどその數と種類とに富むを以て、比較研究法を施すの餘地を授く、後紀の社會形態に比し、遙かに單純なるを以て、その研究者にかの神經學者が、蟲及軟體動物に於ける神經組織上の諸元素研究上發見すべき

が如き一長所を授け、その逐次的階段は、最終結果に到達せしむべき諸方法を呈露すべし、歐米文明の研究に限られたる社會學は、小麥及鳥獸肉の研究に限られたる食養學に、譬ふべきものあるべし。

現存せる蠻人の生活及諸事情と、太古に於ける吾人の祖先の生活及諸事情との間に、一致ありと假定し得べきに非ず、Schiller が「人類の現はれたる初期を、現原民族てふ鏡に照して復活せしむ」とし、又米の W. I. Thomas 教授が、蠻人を以て「一種の現代先祖」視したるは、共に一の文飾に過ぎず、されど考古學的證據は、現代の石器時代と一萬年以前に於けるそれとの間、酷似せるを示す、生物學的進化論者は、現在の下級階段に就き、過去の諸形態を洞察するの能あるに非ずんば、決して功多きを得ざるべし。

諸材料批判上用意周到なるを要す、異民族に關し旅行家の語る所を、決して殘らず比較社會學の材料として、鵜呑みに取るが如きことあるべきに非ず、されど又吾人は訓練あり信頼すべき科學的觀察者により積まれたる、莫大の證據を供給せらる。尙他の一點を注意するは、時宜を得ずとはなさず、即ち他の諸事情同じとせんか、最良の證據は吾人自身の五官により集められたるものなり、原始的諸社會型に興味をおけばとて自己の身邊に現はるる諸社會事實の、不屈なる研究及解析を、輕視するの弊に陥るべきに非ず、寧ろ増されたる興味及能力を傾到し、現社會に就き自家一流の觀察に當るべきなり、吾人が遠方材料を搜すは、内に發見することなかるべき材料を得、特に又比較的發生學的研究の餘地を發見せんがためなり。(未了)